

# 『松山本草』に収録されているラン科植物の図

夏井 高人

## 1 はじめに

江戸時代に森野旧薬園（奈良県宇陀市大宇陀町）の10代目当主森野藤助（号：賽郭）が生薬原料として同薬園内で栽培していた植物を写生した『松山本草』なるものが存在することは、文字情報としてはこれまでも知られていた。しかし、その内容を知ることは、ほとんど不可能な状態にあった。

今年になって、高橋京子氏（大阪大学総合学術博物館・資料基礎研究系准教授）により、待望の写真複製が大阪大学出版会から刊行された<sup>1</sup>。これは、『松山本草』全10巻（1750～1768）を完全に複製したもので、学術上の価値が非常に高いというだけでなく、美術品としても大きな鑑賞価値を有する。労作であり、敬意を表すべきものだと考える。ただ、同書には原書の掲載順に従った現代の学名対応表はあるものの、事項索引がない。そのため、例えば、ラン科植物だけ調べたいと思っても全頁を精査しなければならないという点で若干の不便さがある。

そこで、同書に収録されたラン科植物の図版について、網羅的に拾いあげた上で、若干の考察を加えてみたので、その結果を公表したいと思う。

---

<sup>1</sup> 高橋京子『森野藤助賽郭真写「松山本草」—森野旧薬園から学ぶ生物多様性の原点と実践』（大阪大学出版会・2014年2月19日）

## 2 『松山本草』に収録されているラン科植物

『松山本草』に示された植物は、基本的に名前と図だけとなっているが、例外的に注記が付されたものがある<sup>2</sup>。全体構成は、『本草綱目』や『大和本草』などの本草書で採用されている植物分類に概ね従っているものの、必ずしも一致しているわけではなく、重複もある。

以下、『松山本草』に収録されているラン科植物の図版を現在のラテン語学名順に並べ替え、整理を試みた結果を以下に示す<sup>3</sup>。

### 2.1 シラン (*Bletilla striata* (Thunberg) Reichenbach f.)

図版番号 33

「白及」として記載、通名として「シラン」とあり、本草名として「甘根」及び「連及草」との記載がある。

地上部と地下部が描かれている。地上部の花は赤紫色で、「外に白花あり」との注記がある。地下部は塊根状の白いバルブ部分が示されており、生薬「白及（白芨）」の由来を示すものと思われる。

### 2.2 エビネ (*Calanthe discolor* Lindley)

図版番号 418

---

<sup>2</sup> 注記部分は、『本草綱目』や『大和本草』等の本草書からの引用と思われる。

<sup>3</sup> 本文中の図版番号は、前掲『森野藤助賽郭真写「松山本草」—森野旧薬園から学ぶ生物多様性の原点と実践』にある図版番号を示す。

名称の記載なし。通名として「キンエビ」とあるのみ。

地上部のみが描かれ、下部にある古葉は半分枯れており、新葉は上方に向かって生えている。花茎は茶褐色、花序に多数の花がついている状態が示されている。唇弁は3裂し、白色、距も白色、それ以外の部分は橙色となっている。蕊柱も白色に見える。

なお、高橋京子氏は、この図にある植物をキエビネ<sup>4</sup>と同定している。

### 2.3 ツチアケビ (*Cyrtosia septentrionalis* (Reichenbach f.) Garay)

図版番号 205

「列當」として記載、通名として「ツチアケビ」及び「山トガラシ」とある。

「山トガラシ」は「山唐辛子」を意味するものと推定される。

地上部のみが描かれており、赤く色づいたさく果を多数つけた花序の状態が示されている。

### 2.4 シュンラン (*Cymbidium goeringii* (Reichenbach f.) Reichenbach f.)

図版番号 155

「獨頭蘭」として記載、通名として「ホクリ」とある<sup>5</sup>。「獨頭蘭」は、「一茎一

---

<sup>4</sup> Kew の分類によれば、キエビネの学名は「*Calanthe striata* R. Brown ex Lindley」となり、従来のキエビネの学名「*Calanthe sieboldii* Decaisne ex Regel」は、その異名 (Synonym) となる。また、Kew の分類では、タカネエビネ (*Calanthe bicolor* Lindley) をキエビネと同一の植物としている。

<sup>5</sup> 『大和本草』では、「獨頭蘭 ハクリ」とある。

花」と同義と思われる。

地上部と地下部が描かれており、地下部は根とバルブ（3個）を識別できるように描かれている。花は1個で、唇弁は白地に紅の斑紋があり、他は緑色となっている。

## 2. 5 セッコク属の一種 (*Dendrobium* sp.)

図版番号 495

「石斛」として記載、通名として「セッコク」とある。

岩上に着生している状態を示し、茎は褐色を帯びた緑色、節は2節～6節、葉は天葉のみで、いわゆる獅子芸の一種で対生状となっており、あたかもシュロの類と同じものであるかのように描かれている。花は、一見するとフウラン (*Neofinetia falcata* (Thunberg) H. H. Hu) の花のように見える白花だが、距はなく、唇弁は青色で袋状になっているように見える。蕊柱または唇弁基部周辺は淡桃色で示されているが曖昧であり明確ではない。花以外の部分だけであれば、例えば、石斛品種の1つである「肥後昇龍」との類似性を見出すことができる。

しかし、花の描写は奇異であり、このような形状や特徴を有する石斛類は、日本を含む東アジア地域には存在しない。おそらく、花の部分は、想像で後に書き加えられたものではないかと思われる。高橋京子氏は、セッコク (*Dendrobium moniliforme* (L.) Swartz) と同定しているが、花の部分を除けば確かにセッコクとして同定可能なものの、図のとおり形状の花が実在したとすれば、明らか

にセッコクではない。

## 2.6 オニノヤガラ (*Gastrodia elata* Blume)

図版番号 127

「赤箭」として記載，通名として「ヌスビトノアシ」<sup>6</sup>との記載，本草名として「天麻」との記載がある。

図は，地下部から花茎が立ち上がった状態を示すもので，全体に赤茶色の彩色がなされている。花序の部分は，不正確ながら，結実してさく果になった状態を示しているものと推定され，花卉の残滓が付着したような状態で示されている。

## 2.7 ボウラン (*Luisia teres* (Thunberg) Blume)

図版番号 510

名称の記載なし。通名として「ボウラン」とあるのみ。

山谷の崖にぶら下がるようにして着生している姿が描かれている。古い茎の部分は茶色，新しい茎と葉は緑色。花は，唇弁が暗紅褐色，それ以外の部分は黄褐色で示されている。

## 2.8 サギソウ (*Pecteilis radiata* (Thunberg) Rafinesque)

---

<sup>6</sup> 「盗人の足」との意味だと思われる。地下部の形状から由来する名称と推定される。

図版番号 466, 486

いずれも「鶴菜」として記載，通名として「サギサウ」とある。

いずれも地上部のみが描かれ，並花品。図版番号 466 の個体は，葉が直立し，距は褐色。図版番号 486 の個体は，葉がしな垂れた感じになっており，距は緑色。

## 2. 9 ネジバナ (*Spiranthes sinensis* (Persoon) Ames)

図版番号 176

「綬草」として記載（「綬」には「ジュ」とのフリガナがある。），通名として「モジズリ」とある。

地上部のみ描かれており，開花時の状態を示し，花は紅色。葉には中心葉脈部分に白く細長い斑模様があるように見える。このような斑模様は，野生種の中に散見されるもので，格別に珍しいものではない。葉は，比較的短く，湾曲しているので，ネジバナを細かく分類する立場では，*Spiranthes sinensis* (Persoon) Ames var. *amoena* (M. Bieberson) H. Hara に該当する植物だということを示すものとして理解することができる。

## 2. 10 ヒトツボクロ (*Tipularia japonica* Matsumura)

図版番号 156

「菠母栗」として記載，通名として「ヒトツボクリ」とある。「菠母栗」の読み

は不明だが、「母栗」は「ボクリ」と読める。

地上部と地下部が描かれ、地上部は葉が1枚（花茎、花序、花、果実等の部分の描写は全くない。）、地下部はバルブが1個と髭根状の根となっている。葉の形状はヒトツボクロ (*Tipularia japonica* Matsumura) の葉の特徴を示すものというよりは、サイハイラン (*Cremastra appendiculata* (D. Don) Makino) の葉に近いような形状を示している<sup>7</sup>。

ヒトツボクロの図は、シュンラン（図版155）と並べて描かれており、比較対照できるようになっている。シュンランの図ではバルブが3個となっているのに対し、ヒトツボクロの図では1個だけなので、地下部のバルブの個数に従った命名だということを示唆するものと考えられる。

以上のほか、同定困難な図版であり、通名として「ヲキナグサ」との記載のみのあるものがある（図版番号427）。葉が白色で粉を吹いているようにも見えるが、フウラン (*Neofinetia falcata* (Thunberg) H. H. Hu) の枯死した個体を写生したものかもしれない<sup>8</sup>。

以上

---

<sup>7</sup> サイハイランとの誤認・混同の可能性があり、更に慎重な検討を要する。

<sup>8</sup> 上記のセッコク属の一種の図が不正確で同定困難だということと併せ考えると、森野藤助は着生蘭の栽培方法を全く知らなかった可能性があることを指摘したい。貝原益軒の『大和本草』にも石斛など着生蘭の図は収録されていない。これらのことは、『松山本草』が作成された当時、長生蘭の栽培が盛んになるまでは石斛類の園芸としての栽培方法が一般には知られていなかった可能性を示唆するものだと考えることができる。